

様式③

提出日 2019 年 1 月 11 日

2018 年度 琉球弧研究支援 報告書

研究テーマ「竹富島種子取祭について」

氏名：阿波根奈緒 嵩島芽衣

所属学部学科：人文学部こども文化学科

I. 初めに

沖縄県竹富島で行われている種子取祭(タナドゥイ)は、約600年の伝統があると言われており、1977年(昭和52年)に国の「重要無形民俗文化財」の指定を受けている。

種子取祭は、清めた土地に種を蒔き、無事に育つことを願う五穀豊穡祈願のお祭りであり農耕に関する行事である。したがって、奉納芸能は、農耕の模倣的な所作、および武芸の披露にある。特に草を刈る様子、鋤で耕し種を蒔く様子等独特な所作は、明らかに農耕儀礼の形式を踏んでいることが見て取れる。また、なかでも特徴的な行事として、「ミルク」と呼ばれる神が子供たちを引き連れて現れ、さまざまな穀物や草鞋を用いてめでたい歌をうたうという行事がある。このミルクは弥勒(みろく)のことと思われ、穀物や子宝をもたらすと考えられている。

種子取祭は、不眠不休の行事であり、毎年旧暦の9月、10月の甲申(きのえさる)の日から甲午(きのえうま)の日までの9日間にもわたって行われている。特に7日目、8日目を中心に、80余りの伝統芸能が神々に奉納される。

本稿では、地元住民をはじめ、様々な関係者の聞き取り調査を中心に、行事を通して見る地域社会の協同性を明らかにしたい。

II. 研究の目的、動機

竹富島は、地域住民の絆が極めて強いとして知られている。それは、種子取祭をはじめとする様々な伝統的行事・祭事が関わっている地域と考えた。そこで、多くある行事の中でも特に、国の重要無形民俗文化財となっている種子取祭に焦点をあて、地域住民の意識や関わりを調査したいと思った。また、歴史ある伝統的行事を継承するための努力や工夫、子供たちにとっての意味は何かを調べたいと思った。以上が、この研究に取り組もうと思った理由である。

III. 研究方法、地域、期間

本やインターネット、新聞記事等を通して種子取祭についての文献調査を行い、2018年9月18日(火)～21日(金)には、実際に竹富島を訪ねた。そこでは、種子取祭を主催する公民館や竹富小中学校にて、聞き取り調査を中心に、種子取祭に対する島民の意識調査、及び小学校との関わりについての研究を行った。

IV. 結果

文献調査、及び現地での聞き取り調査(別紙参照)で以下のことが分かった。

・種子取祭を続けているのは、重要無形民俗文化財になったからでも、観光客に見せるためでもない。竹富島の方にとって種子取祭は島の精神的支柱であり、この伝統が無くなってしまうと、竹富島らしさが消えてしまうのではないかと懸念されるほど、重要な行事であること。

・小中学校では芸能練習などの取り組みは行っていないが、公民館で3つの地域に分かれ、それぞれの地域の方(師匠)から踊りを教わっている。種子取祭当日は、小中学校は休みとなり、芸能に参加しない児童・生徒は全員で見学をする。また、石垣島や沖縄本島に進学している竹富島出身の生徒に対しては、主催する公民館長が各学校宛てに『種子取祭参加に際する公欠願』の文書を出し、種子取祭に参加しやすい環境をつくるとともに、種子取祭の維持存続に取り組んでいること。

・子供たちにとっても、幼いころから身近にあり、共に創ってきているものである。この種子取祭は誇りであり、この行事の継続とともに、竹富島を守り続けていきたいと思っている。

V. 考察、分析

私たちは普段、伝統芸能にあまり関心が無いため、竹富島の子供たちも同じように、種子取祭のような伝統芸能に意欲がないだろうと思っていた。しかし、実際に竹富島の子供たちに意識調査を行ったところ、積極的に取り組んでいることに驚いた。

今回の調査で、種子取祭は人々の絆を醸成する大切な祭礼であると強く感じた。子供たちも竹富島の一員として誇りに思い、幼いころから神々に対する信仰があり、種子取祭を主体的に創ってきた。それによって、竹富島民が最も大切にしている一致協力する精神である「うつぐみの心」を育み、その精神を再確認する行事として島民に意識されているのだろう。

また、この大切な伝統的行事を観光化したり、屋台などを出したりするのではなく、代々築いてきたものを、そのままの形で残し続けている。これは竹富島の人による竹富島のための祭祀であり、島を守っていくうえで重要な役割を果たすものだと考えた。それを継承していくために、島を出た人も本行事の際には帰ってきやすい環境づくりを行っているだけで、特に工夫はしていないと仰っていたが、種子取祭が長い間続いているのは、島の一人ひとりの高い意識によって守られてきたのだと感じた。

VI. 今後の展望

今まで受け継がれてきた種子取祭を、観光や見せるものにするのではなく、島の大切な伝統芸能として、昔のままの姿で後世に継承し続けることで、竹富島は守られていくと思う。

また、石垣島や沖縄本島に進学、就職しても、竹富島の一員であることを自覚し、「うつぐみの心」を忘れず、大切にしてほしい。

VII. 終わりに

竹富島の強い絆や、うつぐみの心は、種子取祭をはじめとする各種の伝統的行事・祭事を通して育まれているのだと実感した。彼らは、竹富島の一員であることに誇りをもち、竹富島の伝統を守り続けているのである。研究を通して今まで知らなかった竹富島の文化に触れることができて

良い機会であった。竹富島の人々とも触れ合うことができ、調査に協力してくれたことに感謝申し上げたい。

VIII. 参考文献、調査協力

神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成

【<http://21coe.kokugakuin.ac.jp/modules/wfsection/article.php?articleid=110>】

星の砂 12 号、創刊号

竹富町誌第 2 巻

IX. 指導教員コメント

本研究は、現地の小・中学校や公民館に出向き、実際の種子取祭の様子や、島の人々の種子取祭についての意識調査を行っている点が良い。そのことで、文献の整理だけに終わらない研究になった。この点は評価できるだろう。